

備前岡山藩池田綱政の和歌修練 ②

―飛鳥井雅章添削の七十七首を中心に―

福留瑞美

はじめに

備前岡山藩二代藩主・池田綱政（1638-1714）は、元服前から飛鳥井雅章（1611-1679）の歌翰門弟となり、延宝三年（1685）には甥の一条内房（1652-1705）を通じて中院通茂（1631-1710）から和歌の添削を受けて交流が始まり、生涯かけて詠作活動に取り組んでいる。林原美術館には、それらの添削原本・家集・詠草類など、貴重な資料が数多く残されている。

そこで、本稿では飛鳥井雅章が添削したという『池田綱政七十七首』の成立過程を探ることで、池田綱政が飛鳥井雅章からどのような指導を受け、詠作活動に励んでいたのか、林原美術館に残された資料を基に見ていきたいと思う。

一、人に披露するための作品『池田綱政七十七首』

『池田綱政七十七首』（書跡284.19-2 袋綴 21.2 × 15.4cm）は、「故月見櫓 特進源通茂卿添削詠草二冊」と記された外包紙（明治期か）と、「特進源通茂卿添削詠草冊」と記された内包紙の中に、「池田綱政百首」（拙稿「備前岡山藩池田綱政の和歌修練 ①」『國文學』一〇五号に既述）とともに収められている。

この二冊は、サイズは異なるものの同じ装幀であり、飛鳥井雅章の添削詠草で、添削に至るまでの成立事情を記す跋文を有するなど共通点が多く、同じ目的で近い時期に成立したため一つにまとめられていたものと考えられる。また、内包紙に「特進源通茂卿添削」とあるのは、後人の誤記か包紙の転用か不明であるが、内容と異なるため内包紙の「特進源通茂卿添削」とある右横に「二位雅章卿添削」と加筆されたのであろう。

『池田綱政七十七首』は、外題に「合點庚戌季春孟秋兩度七拾七首」とあり、前三十七首の内題に「庚戌春合点歌者己酉孟冬及臘月古今仮名題」、後四十首の内題に「庚戌季夏合点歌同春」とある。跋文にも兩度の成立事情が記されており、以下に釈文を示す（以後の和歌に付した数字は、(対照巻と共通する各作所出での通し番号)。(振り仮名を有する漢字は、または平仮名表記であったことを表している)。

三十路あまり七つの言の葉は、戌の年の霞立ち深むころ都に遣はし侍りけるを、公の暇なくして東の旅宿のすさみに具して下られ侍りぬ。弥生の未つ方に帰り給ふ頃、我はまた東の勤めに下り侍るに、駿河の国富士川のほとりにて行き会ひぬ。雅章卿より物語し侍らんこと有。些かのほど会いたき由送られしかば、やがて岩淵といふ怪しの賤屋に立ち寄りて侍けるに、とばかり有ておはしぬ。この一卷を取り出で給、あらまし・此道の物語・口伝へ等し給て立ち別ぬ。其夕べ清見瀧に留まり給ふ由聞きて、申遣はしける。

s78 別行名残おもへば清見瀧我も関守る身とやならまし

あくるつとめて、返しに

s79 清見瀧心をとめて名残思ふ人の言葉や波の関守

こゝかし目に触れし勝景を詠みける歌も多く合点を加へられ給はりぬ。

同じき夏遣はしける四十路の歌は心ち例ならず侍し折々のすさみに書き集め侍るなり。猶人のみるめをかり侍らん藻屑にもあらずかし。二十年余り合点を給りし歌数あまた侍れども同じ年の中を選び集めてこれには記しぬ。

静見花 野郭公之上

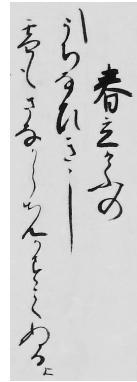
s80 けふも又あかず木陰にくらさばや事茂き世を花に忘れてとある。前三十七首は三月末に雅章と富士川辺りで行き会って直接説明を受けたとあり、後四十首は病気の合間に書き集め夏に雅章へ遣わしたという。そして、合点が付けられた「静見花」(s80)が脱落していたため、「千年のためし」(s23)の下、「野郭公」(s24)の上に補入するよう加筆されている。したがって、前三十七首は正しくは三十八首で、外題の「兩度七拾七首」は七十八首が正しいことになる。本書が人に見せるための二次的創作物で、手控え草稿本であることを示している。

二、「前三十八首」のもととなった真の添削対象

飛鳥井雅章筆添削折紙綴（書跡27.5×4折紙綴14.3×42.4cm）は、折紙二枚を重ね右端中央一カ所を紙縫りで綴じ、歌題「春立けふの」〜「庭の落葉を」の計四十三首について記述があ

る。その冒頭は、

a01 うちなひき
春立けふの



雪もさながら先かすみぬる歎

霞にこめて

a02 いつるより——

聞え候へとも百首題の次第二而

見候へは月は少はやく候歟末の題にて候

鶯さそふ

a03 ねやちかく—— 咲そめて

とあるのに対して、『七十七首』の冒頭は、

(寛文十年)
庚戌春合点歌者己酉孟冬及臘月古今仮名題

春たつけふの

s01 うちなひき春たつけふの山のは、

ゆきもさながらまつ霞ぬる

霞にこめて

聞え候へとも百首題ノ次第二而見候
へは月は少早く候歟末ノ題にて候

s02 いつるより霞にこめて窓の内に

うつるもつすき春のよの月

鶯誘ふ

s03 闇ちかくあさけのまるとにさき初て

つくひすさそふ春の梅かえ

とあり、歌題・合点・初句・評価・歌序などが一致する。添削折紙綴の棒線（—）は省略したことを意味し、a01末尾の「歎」の小字はその箇所が訂正本文であることを表している。そして『七十七首』s01の下句「ゆきもさながらまつ霞ぬる」とあるので、雅章の訂正本文を採用していることがわかる。

そして、添削折紙綴が対象とした真の詠草について『七十七首』跋文に「この一卷を取り出で給、あらまし・此道の物語・口伝へ等し給て立ち別ぬ」とあり、折紙綴（折紙二枚）を「この一卷」と表現するとは思われず、提出した詠草一卷も添削折紙と同時に返却されたと考えられる。『池田綱政百首』のものと詠草一三四首（卷子一卷）も別記の添削折紙四枚が存在し、綱政自ら詠草一三四首の行間に添削を朱書きする。しかし詠草一三四首の場合とは違い、添削折紙綴が対象とした詠草一卷（前三十八首）の前身の詠草は林原美術館に存在せず散佚したようである。

三、「前三十八首」のもととなった散佚詠草

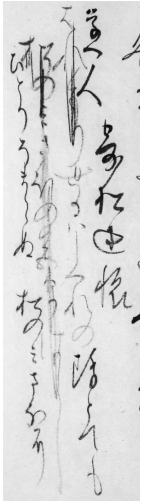
日次詠草（綱政自筆自撰家集）の『詠草独吟寛文九年八月十四日
同十年庚戌六月迄』（書

跡(295)綴葉装(全二七四首)には、添削折紙綴と共通する歌が散見しており、添削折紙綴の対象であった散佚詠草を復元することが可能である(対照表①(45)参照)。

対照表に示したように、まず添削折紙綴(a01~a43)と『七十七首』(s01~s80)に通し番号を振って対照させると、添削折紙綴と『七十七首』の前三十八首(s01~s37・s80)が対応する。そして、『詠草独吟』では「古今和歌集中句題二十六首」(B112~B137)のうち二十四首が一致し、添削折紙綴の内容が朱筆で書き入れられている。次いで、「古今和歌集中句題二十六首」の末尾に「点廿一首、外二●朱星ノ題ノ歌同時ノ点也」とあるので、それ以前に点在する●(朱星)が付された十九首を添削折紙綴の歌序に合わせて抜き出すと、推定四十五首(①~④5)となる。

また、朱星の十九首(27~45)は、網政自筆日次詠草の『愚詠藏艸』(書跡295)綴葉装(全五四七首) A431~A547間にも散見しており(添削の書入なし)、『詠草独吟』の本文(推定四十五首)よりも前の姿を有している。これは『愚詠藏艸』 A430~A547の殆どが『詠草独吟』 B001~B111へと再掲関係にあるからである。

40
A547



四、『七十七首』跋文にある「勝景を詠みける歌」

『七十七首』跋文には「前三十七首」に続いて「こ、かしこ目に触れし勝景を詠みける歌も多く合点を加へられ給はりぬ」とある。これに相当すると考えられる和歌が『詠草独吟』に存在する。「弥生の十日余り船出し侍けるに年比相知れる方より」とある贈答歌(B220~B223)以降、寛文十年三月参府の旅の二十首(B220~B239)が続いており、その中に『七十七首』に含まれていない和歌で合点が付された二首(B232・B233)が存在する。

雲のたちゐ霞の色雪にうつるひ様々に
かはるけしきことにおもしろし

B232 〵危ニ存候
いくたひか見るめにかはるふしのねの

雲やかすすみゆき花つゝみて

霞のひまに白雲のうき出たるとみえしは
みな麓の雪にそ有けると晴れて後に詠て

B233 〵珍重ニ存候体も一段宜し
春かすみたえまにみゆるしら雲

ふしのすその雪にそ有ける (以下略)

過にし日やのむたにをしうつるこる富士川の西に若
洲といふ所にて大納言雅章卿関東より帰り上り給ふ

にゆきあひ侍りしまゝかりのやに立よりこゝに侍侍
 るよし申入しかは雅章卿ほとなくたちよりおはしま
 して何くれと互ひに思ふ事うらなくつきすまじう語
 らひ侍りぬ日もかたふき侍もはいぎたまへとて名残
 かに暇乞ひて立ち別れゆくに限りなく別のかな
 く覚侍ければふみ書き乱して今宵は清見かたぢかま

B238 一段優美二問え候
 わかれゆく名残おもへはきよみかた

我もせきもる身とやなゆけん (s78に相当する和歌)

あくる夕への宿りへ返事とてもてぎたゆぬ
 様々同じ心のほと書つらね給ひて

B239 清見かた心をとめてなこりおもふ

人のこと葉やなみのせきもり (s79に相当する和歌)

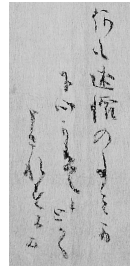
とあり、跋文の「勝景を詠みける歌」で合点をもらった和歌と
 は、これら B232・B233・B238 の三首と考えられる。

五、『七十七首』「後四十首」のもととなった詠草

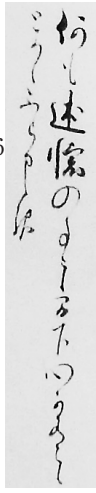
池田綱政詠草四十五首(書跡 293・27 卷子一卷 縦18.7cm)は、
 冒頭「愚詠 綱政上」とあり、和歌一首二行書き、「晚霞」「暮秋」

の計四十二題からなり、墨筆の合点・書入を有す(対照表 b01)
 b45)。「後四十首」(s37~s77)と歌題・合点・和歌・書入・歌序
 が一致するため、「後四十首」のもととなった詠草であり、雅
 章が添削対象とした真の詠草ということになる。「前三十八首」
 とは違い、別記の添削折紙は確認できず、綱政自筆の『七十七首』
 の書入と比較すると、筆跡が異なるようである。よって、詠草
 四十五首の合点・書入は雅章の筆跡と考えられる。

b45



s77

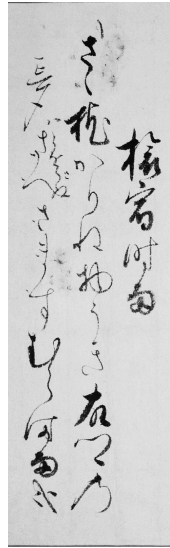


また、詠草四十五首 b06 の結句の書入「にはふ春かせ」の「春」
 (次図上段) は、綱政自筆家集・詠草には見られない字体である。
 対して、飛鳥井雅章筆添削折紙(書跡 275)「詠草一三四首の添
 削」において「春」の漢字全七カ所あるうち四カ所(01・02・
 47・58番)で使用されている字体(図下段)と一致する。

b06



以上により、池田綱政詠草四十五首は、綱政が雅章に提出した詠草の原本であり、その原本の詠草に雅章が墨筆で合点や書入を直接書き記したと考えられるのである。したがって、書入部分の擦り消ち（b28）も雅章によるということになる。



そして、詠草四十五首において合点が付された和歌は三十六首あり、それらの合点には次のような長短の差が見られる（次図の□は合点なしの箇所を表す）。最長と最短では三倍ほどの差があり、評価の違いがあったのであろうか。現存する雅章筆添削折紙や『七十七首』の合点に長短の差は見られない。

01	15	16	30	31	45
—	—	—	—	—	—
□	□	□	□	□	□
—	—	—	—	—	—
□	□	□	□	□	□
—	—	—	—	—	—
□	□	□	□	□	□
—	—	—	—	—	—
□	□	□	□	□	□
—	—	—	—	—	—
□	□	□	□	□	□

六、「後四十首」（詠草四十五首）に関連する日次詠草

まず『七十七首』の外題「雅章卿合点庚戌季春孟秋兩度七拾七首」の命名について確認しておきたい。『詠草独吟』や『池田家履歴略記』によると岡山にいた綱政は、三月十一日船出、十二日浪花着岸のち陸路、十六日出京、二十七日江都邸入り、四月一日登城とある。『七十七首』の跋文によると「弥生の末つ方」に富士川のほとりで雅章（武家伝奏として江戸へ派遣されていた帰り）と行き会ったとあるので、外題の「季春」（三月）とは雅章の合点（添削折紙）を受け取った時点のことになる。したがって、外題の「孟秋」（七月）とは雅章の合点（詠草四十五首）が綱政に届けられた時点と考えられるが、「後四十首」の内題には「季夏合点」（六月）とあつて一定しない。この時期の体調不良もあり、記憶が定かでないほど後に『七十七首』が成立した可能性も考えられる。

そして、「後四十首」（詠草四十五首）の和歌を有する日次詠草は、『詠草独吟』寛文九年八月十四日
同年庚戌六月迄（全二七四首）の二首（B181・B218）と『愚詠独吟』寛文十年六月廿三日（書跡29542綴葉装 全三三一首）と『愚詠独吟』寛文十年六月廿三日（書跡29542綴葉装 全三三一首）とD001～D120間に散見する四十三首、および『詠草独吟』の改訂日次詠草の『愚吟草』甲（書跡29543綴葉装 全三二〇首）がある。

『詠草独吟』において、雅章の添削文言は朱筆で傍記され、合点の付された詠歌は『七十七首』の「前三十八首」（添削折紙綴）の三十六首・「勝景を詠みける歌」の三首・「後四十首」（詠草四十五首）の一首、計四十首のみである（B218は付け忘れ）。

『愚吟草』C001～C232は『詠草独吟』から二三二首が撰出され、「前三十八首」（対照表①～④）に相当する詠歌は雅章の訂正本文が採用され原歌がわからない状態になっている。続くC233～C303は『愚詠独吟』D001～D089間の六八首と一致するが、「後四十首」（詠草四十五首）に相当する詠歌に合点や改訂はなされていない。遊紙三丁を挟んでC304～C360は雅章添削の詠草八十首（寛文十一年十二月到着）から撰出された五十五首の改訂本文と、身まかった恋人を悼んだ長歌・反歌が続いている。

以上から『愚吟草』C233～C303は、『愚詠独吟』の当時の状況を表しているのではないだろうか。『愚吟草』C294～C303「四季十首和歌」から後には遊紙十三三分があり、『愚詠独吟』D090以降の本文が存在していれば十分に書写できたはずである。したがって『愚詠独吟』はD089あたりまでしか詠歌がなかったか、もしくははまだ書き始めてなかった可能性が考えられる。また、雅章の添削（詠草四十五首）が手元になれば、C162・C196・C233～C303においても本文改訂を行っていたはずであるが、実際には合点や改訂

がなされていないので、詠草四十五首が完成する前に『愚吟草』C303までが成立していたと考えられるのである。

さて、『七十七首』跋文によると「後四十首」（詠草四十五首）は四月以降在府期間中の病気の合間に書き集め、雅章へは夏に遣わしたという。詠歌は内題に「歌同春」、跋文に「同じ年の中を選び集めてこれには記しぬ」とあり、組題・当座ではなく、既出の詠歌（寛文十年詠）から撰出したとある。よって、内題の「歌同春」とは『詠草独吟』の寛文十年三月詠（B181・B218）を初めとしていることを表し、『愚吟草』や『愚詠独吟』に所収される四十三首が跋文の「同じ年の中」というのであろう。

七、『池田綱政七十七首』における作意

池田綱政が『七十七首』においてどのような詠歌を撰出し、どのような改訂を行ったのか、確認しておきたい。これにも飛鳥井雅章の指導があったものと思われるからである。

《表1》に示したように、合点がある詠歌(1)が全て採用され、合点がなく書人のある詠歌(3)から「前三十八首」ではs02・s04の二首、「後四十首」ではs49・s50・s62・s64の四首が撰ばれている。その(3)の中で歌表現について訂正本本文の書人がある詠歌(4)は各

一首しかないが必ず採用している (s04・s62)。

そして、雅章の訂正本本文がある場合で、合点ありの詠歌(2)では雅章の訂正本本文を採用して原歌がわからないように改訂し、合点なしの詠歌(4)では原歌の右横に訂正本本文を傍記している。

《表1》『池田綱政七十七首』における採用基準

添削原本↓七十七首(前38+後40)	推定45↓前38	詠草45↓後40
(1)合点あり	36首↓36首	36首↓36首
(2)合点あり+訂正本本文あり	16首↓16首	8首↓8首
(3)合点なし+書入あり	7首↓2首	8首↓4首
(4)合点なし+書入あり+訂正本本文あり	1首↓1首	1首↓1首
(5)合点書入なし(無記入)	2首↓0首	1首↓0首

おわりに

二十年余り飛鳥井雅章の歌翰門弟であった池田綱政は、熱心に和歌に取り組んでいた。普段から日次詠草を記し(『愚詠蔵艸』『詠草独吟』『愚詠独吟』など)、題詠歌・四季歌・景勝歌・贈答歌など書き集め、時には添削依頼用の詠草(散佚四十五首・詠草四十五首・詠草一三四首・詠草八十首・詠草五十首など)を作成し、雅章から添削折紙などが返却されると提出用の詠草や日次詠草に合点や書入を傍記して確認する。そして、日次詠

草の一冊が完成すると改訂日次詠草を作成する(『愚吟草』)。その際、歌教を絞る、詞書きや人名表記を整え、添削してもらった詠歌は雅章の訂正本本文を採用し改訂する。

継嗣時代の寛文十年は、同門弟の浅野綱晟から雅章添削の詠歌を所望されている時期であり、披露用の作品(『七十七首』『百首』)を作成するにあたり、雅章から撰歌方法や訂正本本文の扱いなどについても説明を受けていたのではないだろうか。

池田綱政へ届けられた浅野綱晟の詠草は、雅章の訂正本本文を単に傍記するだけのもの(寛文十年三月出来の詠草二十首)から、『七十七首』のように雅章の訂正本本文を採用して改訂したと考えられるもの(詠草五十三首)へと変化する。二人の和歌交流においても雅章の尽力があったと考えられるのである。

《対照表》『池田綱政七十七首』に関連する詠草と添削

- ・算用数字は各資料における通し番号。○の数字は推定本文の順番
- ・添削 a 「飛鳥井雅章筆添削折紙綴」、b 「池田綱政詠草四十五首」
- ・A 『愚詠蔵艸』、B 『詠草独吟』、C 『愚吟草』、D 『愚詠独吟』
- ・行書体の書入は雅章、□の書入は綱政によることを表す。
- ・……は見せ消し記号、\は合点、×は当該歌なしを表す。
- ・通用の字にした箇所や、書入の位置を移動した箇所がある。

<p>B116⑤</p> <p>花のところが なつかしき一木のさくらさきより 花のところがおもひやられて</p>	<p>B115④</p> <p>いつれを梅と にほはすはかた枝のゆきにさく花の ゆきのかたえをいつれを梅とわきてなかめむ</p>	<p>B114③</p> <p>鶯さそふ ／ねやちかくあさけのまことに植をかむ うくひすさそふ春の梅かえ</p>	<p>B113②</p> <p>霞にこめて 百首題ニテ八月八少早シ いつるより霞にこめて窓のうちに うつるもうすき春のよの月</p>	<p>B112①</p> <p>古今和歌集中句題二十六首 春たつけふの ／うちなひき春たつけふの山のは 雪よりかすむあさほらけ哉</p>	<p>前半 B 『詠草独吟』 後半 b 『池田綱政詠草四十五首』</p>
<p>a05 \ x C106 \ s05 \</p>	<p>a04 x C105 s04</p>	<p>a03 \ x C104 \ s03 \</p>	<p>a02 x C103 s02</p>	<p>a01 \ x C102 \ s01 \</p>	<p>添削 ab 日次 A-D 七七首 s</p>

<p>B122⑪</p> <p>尾上のしかは 夕まくれおのへのしかは木かくれの つまこふかたに月やまつらん</p>	<p>B121⑩</p> <p>荻の下葉も 匂ヲ隔而重詞如何 秋やときおきのしたはも今よりは したやすからぬ庭の夕かせ</p>	<p>B120⑨</p> <p>秋のはつ風 きりの葉のもろきのみかは折節を 袖にことはるあきのはつ風</p>	<p>B119⑧</p> <p>夜は螢の ／おこたりのほとそあやしき窓の内に 夜はほたるのひかりありとも</p>	<p>B118⑦</p> <p>なと郭公 ／おもひねのなこりも おしきよ あらましの夢さへおしむ此やとに なとほつきす啼すてゆく</p>	<p>B117⑥</p> <p>あなうのはな ／いとしくはるのなこりそ遠さかる あなうのはなのさかりみるにも</p>
<p>x x x x</p>	<p>a09 x x x</p>	<p>x x x x</p>	<p>a08 \ x C109 \ s08 \</p>	<p>a07 \ x C108 \ s07 \</p>	<p>a06 \ x C107 \ s06 \</p>

<p>B128 ⑰</p> <p>衣手さむし</p> <p>夢たへて霜むすぶよはかたしきの ころもてさむし在明の空</p>	<p>B127 ⑯</p> <p>雪降しきて</p> <p>行末はゆき降りしきてわかねとも けふりそしるへさとの一むら</p>	<p>B126 ⑮</p> <p>枯行小野ゝ</p> <p>あき風もさゆるあらしに吹かへて かれゆくをのゝ霜こほるなり</p>	<p>B125 ⑭</p> <p>時雨くく</p> <p>うき雲の 今よりはしくれくくて見しあとは くれなるふかき うす紅ぬの 山のもみち葉</p>	<p>B124 ⑬</p> <p>初雁かねそ</p> <p>はつ雁かねそ時をたかへぬ</p> <p>たかつてにあき風ふくと 秋風を たかつけそめていつしかに つけぬらん</p>	<p>B123 ⑫</p> <p>やとる月さへ</p> <p>よるは猶つゆもはへあるませの内に やとる月さへかけをみかきて</p>
<p>a15 \</p> <p>x</p> <p>C115 \</p> <p>s14 \</p>	<p>a14 \</p> <p>x</p> <p>C114 \</p> <p>s13 \</p>	<p>a13 \</p> <p>x</p> <p>C113 \</p> <p>s12 \</p>	<p>a12 \</p> <p>x</p> <p>C112 \</p> <p>s11 \</p>	<p>a11 \</p> <p>x</p> <p>C111 \</p> <p>s10 \</p>	<p>a10 \</p> <p>x</p> <p>C110 \</p> <p>s09 \</p>

<p>B134 ㉓</p> <p>逢夜はこよひ</p> <p>あふよはこよひとくるしたひも</p> <p>人心うき もかきりあれは</p>	<p>B133 ㉒</p> <p>忘れかたみに</p> <p>あやなくものころははつらし 袖ともけなはけぬへし有しよの の袖の 忘れかたみにのころうつり香</p>	<p>B132 ㉑</p> <p>あはてとしふる</p> <p>さりととも思ふ心にけふまては あはてとしふる身もたのむ哉</p>	<p>B131 ㉐</p> <p>かつ見る人に</p> <p>いへはえにいはねはくるしあぢきなく かつ見る人にかゝるおもひは</p>	<p>B130 ⑲</p> <p>忍ることそ</p> <p>夜のほとも心をかれてゆめにたに しのふることそいとゝわりなき</p>	<p>B129 ⑱</p> <p>年の暮ぬる</p> <p>まなふばかりにとしのくれぬる</p>
<p>a21 \</p> <p>x</p> <p>C121 \</p> <p>s20 \</p>	<p>a20 \</p> <p>x</p> <p>C120 \</p> <p>s19 \</p>	<p>a19 \</p> <p>x</p> <p>C119 \</p> <p>s18 \</p>	<p>a18 \</p> <p>x</p> <p>C118 \</p> <p>s17 \</p>	<p>a17 \</p> <p>x</p> <p>C117 \</p> <p>s16 \</p>	<p>a16 \</p> <p>x</p> <p>C116 \</p> <p>s15 \</p>

<p>B003 ㉔</p> <p>／むさし野やはてなき空のほとゝぎす 見をくるほとはこゑなおしみそ</p> <p>●野時鳥</p>	<p>B002 ㉓</p> <p>／いさ桜あかす <small>けふも また 花の</small> ことしけき世も花にわすれて</p> <p>●静見花</p> <p>(詠十首和歌 定家題 <small>寛文九年</small> 八月十四日)</p>	<p>B137 ㉒</p> <p>／君か代を二葉の松に結置て ちとせのためし今日やひかまし 点廿一首外二●朱星ノ題ノ歌同時ノ点也</p> <p>千年の例</p>	<p>B136 ㉑</p> <p>／定めなき世はわれのみにあらねども たひ行人をしたふはかなき</p> <p>旅行者を</p>	<p>B135 ㉐</p> <p>／さめて又名残そおしき草枕 ふるさと人の夢のおもかけ</p> <p>故郷人の</p>
<p>a26 \ A432 C003 \ s24 \</p>	<p>a25 \ A431 C002 \ s80 \</p>	<p>a24 \ x C124 \ s23 \</p>	<p>a23 \ x C123 \ s22 \</p>	<p>a22 \ x C122 \ s21 \</p>

<p>B104 ㉔</p> <p>／かれ残るおはなかほす景色そへて 路わがたき <small>もひとつの</small> 野へのあさしも</p> <p>●野逕深霜</p>	<p>B103 ㉓</p> <p>／浦風にのこれるあしもをれふして ほのみしあきのかたみたになし</p> <p>●海辺寒蘆</p>	<p>B102 ㉒</p> <p>ふめはおしふまねはたえんこの比の もみちかさねにうつむ山みち</p> <p>●落葉埋路 聞え候道ノ絶詞如何</p>	<p>B101 ㉑</p> <p>／昨日より <small>また</small> けふも色まさるもみち葉に 山のはめくるしくれをそしる</p> <p>●時雨廻山 衝雪題</p>	<p>B009 ㉐</p> <p>／かさ枕さらぬ夜とてもうちとけて ねられぬ <small>まことに</small> ゆゆをふくあらしかな</p> <p>●旅宿恋恋 <small>嵐</small> <small>吹あらし我は定家卿可 有用捨詞之内ニ而候歟</small></p>	<p>B006 ㉑</p> <p>せきの戸はさつてもみちやたえぬらん ゆきに埋るゝあふさかのやま</p> <p>●関路雪 <small>よろしく候乍去遠やたえ ぬらん如何禁句と存候</small></p>
<p>a32 \ A540 C094 \ s27 \</p>	<p>a31 \ A539 C093 \ s26 \</p>	<p>a30 A538 C092 x</p>	<p>a29 \ A537 C091 \ s25 \</p>	<p>a28 A438 C009 x</p>	<p>a27 A435 C006 x</p>

<p>B111 ④〇</p> <p>／まなへ人世にはしくれのふるとても ひとびそまひぬまつのみさほに</p> <p>●寄松述懐 あたらしくたくみに存候</p>	<p>B109 ③⑨</p> <p>／をの山はゆきにやうつるすみかまの けふりもしろぎ冬の明ほの</p> <p>●炭竈煙白</p>	<p>B108 ③⑧</p> <p>／明ゆくやみねの雲間にみえそめて わたる</p> <p>●山路初雪</p>	<p>B107 ③⑦</p> <p>／灯もかすかに残るまとのうちに あられ玉ちる夜はそねられぬ</p> <p>●窓霰驚夢 一体におもしろく存候</p>	<p>B106 ③⑥</p> <p>／をのか名のうらはもみきはつみ氷あて にほのかよひ路身にはまかせし</p> <p>●湖上水鳥 めつらしく存候</p>	<p>B105 ③⑤</p> <p>／草までも人めにつれて冬くれば かれのみまさる</p> <p>●閑庭草希</p>
<p>a38 \ A547 C101 \ s33 \</p>	<p>a37 \ A545 C099 \ s32 \</p>	<p>a36 \ A544 C098 \ s31 \</p>	<p>a35 \ A543 C097 \ s30 \</p>	<p>a34 \ A542 C096 \ s29 \</p>	<p>a33 \ A541 C095 \ s28 \</p>

<p>B088 ④⑤</p> <p>／うつめたうちりぬるいろのおしければ きはぬ庭に木の葉積りて</p> <p>●紅葉の山下水にうつるひて ちらぬこすゑも見えてなかる</p> <p>(みるほとみなくうつるひしつらみを) 落葉比山の松をみて ●たちまじる峯のみち葉ちりはて、 つれなき松のいろそかくる、 御作意めつらしく存候</p> <p>やうく散ゆくに名残をしてみても とかならずしもぎよめすなとてうつも るまうにふりしくをみてよみける うつめたうちりぬるいろのおしければ きはぬ庭に木の葉積りて</p>	<p>B092 ④④</p> <p>／うつめたうちりぬるいろのおしければ きはぬ庭に木の葉積りて</p> <p>●紅葉の山下水にうつるひて ちらぬこすゑも見えてなかる</p> <p>(みるほとみなくうつるひしつらみを) 落葉比山の松をみて ●たちまじる峯のみち葉ちりはて、 つれなき松のいろそかくる、 御作意めつらしく存候</p>	<p>B083 ④③</p> <p>／うつめたうちりぬるいろのおしければ きはぬ庭に木の葉積りて</p> <p>●紅葉の山下水にうつるひて ちらぬこすゑも見えてなかる</p> <p>(みるほとみなくうつるひしつらみを) 落葉比山の松をみて ●たちまじる峯のみち葉ちりはて、 つれなき松のいろそかくる、 御作意めつらしく存候</p>	<p>B050 ④②</p> <p>／今もまたまてことゝはむいかたしよ おくはいるこき山もありやと</p> <p>●水上より筏をくたし侍るに落葉のお りならねとも古ことふと思出て、 本歌の取やうよろしく存候</p>	<p>B096 ④①</p> <p>／おや思ふ人のこゝろやはしる とちはつる氷のしたのうろくつも</p> <p>●寄魚述懐 結句心やはしるは心はしる ましきとのやうに聞え候か</p>
<p>a43 \ A524 C079 \ s37 \</p>	<p>a42 \ A528 C083 \ s36 \</p>	<p>a41 \ A508 C074 \ s35 \</p>	<p>a40 \ A480 C043 \ s34 \</p>	<p>a39 A532 x x</p>

愚詠 綱政上

<p>b06 月前梅 ／此ころの夜かれす梅にやとる月 つぎのかけにも香<small>かほ</small>やはつづれる</p>	<p>b05 梅香留袖 ／うらみしよ散行くとても袖のうへに むめかゝさそふかせの情は</p>	<p>b04 梅花夜薫 ／ねや近きまとのさよ風寒ぬれと ゆめのたえま<small>名残もほふ</small>にむめかゝそする</p>	<p>b03 雪中梅 ／たちよれば色はさなからうつめとも ゆきさへにほふ庭の梅かゝ</p>	<p>b02 海辺霞 ／あかしかた霞るうらは昔もなく かもなき春の色そのとけき</p>	<p>b01 晚霞 ／<small>先</small>くれぬるか遠かたくら<small>ふかく</small>き山もとの けふりにつづく夕<small>そひてたてる</small>霞かな</p>
<p>b06 \ D095 \ x s43 \</p>	<p>b05 \ D093 \ x s42 \</p>	<p>b04 \ D092 \ x s41 \</p>	<p>b03 \ D091 \ x s40 \</p>	<p>b02 \ B181 \ C162 s39 \</p>	<p>b01 \ D080 \ C294 s38 \</p>

<p>b12 郭公先おもひねの夢にたに きくはつれしき夜はの<small>こゑ</small></p> <p>夢中間郭公聞候共乍去趣向聞ふり候數</p>	<p>b11 水辺落梅 ／散はなのなかるゝすゑはおしけれと むすふてにほふ梅のした水</p>	<p>b10 落梅 ／おしめともかひなく梅のちる比は 木のしたにほふ花のしら雪</p>	<p>b09 旅宿梅 ／人ならはいさとやいはむ梅の花 あたら旅ねの軒はにそみる</p>	<p>b08 山家梅 ／梅さくとたれにも告ぬ柴の戸に にほひや人をさそひきぬらん</p>	<p>b07 梅移水 ／こすゑにも底にもさける梅の花 うすくれなぬににほふ池水</p>
<p>b12 \ D082 \ C296 s49</p>	<p>b11 \ B218 \ C196 s48 \</p>	<p>b10 \ D099 \ x s47 \</p>	<p>b09 \ D098 \ x s46 \</p>	<p>b08 \ D097 \ x s45 \</p>	<p>b07 \ D096 \ x s44 \</p>

<p>b19 ゆくかたはおほつかなしや夕霧の たえまにみゆる雁の一行</p>	<p>b18 霧中雁 夕まくれ雲のいつこも霧こめて こ糸のみわたる秋のかりかね <small>下句あるやうに聞え候</small></p>	<p>b17 あすの別をひきやとゝめむ たなはたにこよひかさまし四の緒に</p>	<p>b16 いとめてひける星合の空 人のみかこゝろありけりさゝかにの</p>	<p>b15 七夕 ほし合の夜半のかさねに^光かしてまし <small>二句今少あるへく候はん殿下句は優美に聞え候 きならしころも袖せはくとも</small></p>	<p>b19 \ D102 \ x s53 \ b18 D101 x x</p>	<p>b17 D020 C243 x b16 \ D023 \ C246 s52 \ b15 D021 C244 x</p>	<p>b14 露むすふ門田のいほはをのつから いな葉にみゆるあきの初かせ 田家早秋</p>	<p>b14 \ D084 \ C298 s51 \ b13 D001 C233 s50</p>
--	---	--	---	---	--	--	---	--

<p>b25 黄菊 いはねともおもひそいつる まかきをうつすきくの色かな <small>てよと歎いづれにても 山ふきの</small></p>	<p>b24 菊似霜 よのまのしもは白きくの花 あさつく日つつる雛にきえかての</p>	<p>b23 月照菊 照せ猶ごとしのなごりの花なれば つゆにやとれるませの月影 <small>下句とがあるへく候歎</small></p>	<p>b22 菊帶露 玉をかさしのきくのしら露 置そひて 色もかもあかぬ詠めのませの中に</p>	<p>b21 重陽宴 袖にそかさすやとの白菊 我もけふ世の人なみ〇にむらさきの</p>	<p>b20 閑居月 しけれるやとに月そことふ 払はねはつゆのまに〇八重むくら</p>
<p>b25 \ D120 \ x s58 \ b24 D112 \ x s57 \ b23 D111 x x b22 \ D110 \ x s56 \ b21 \ D109 \ x s55 \ b20 \ D085 \ C299 s54 \ x</p>					

<p>b31</p> <p>うきなから命つれなくこよひまで まつにかぎりも有世なりけり</p> <p>待逢、</p>	<p>b30</p> <p>忘れしなこよひそむすふ初尾花 なひく。袖さへつれしぎものを</p> <p>初逢恋</p>	<p>b29</p> <p>降りきり庭もひとつの池水の こほりにつもる雪の明ほの</p> <p>氷上雪</p>	<p>b28</p> <p>さゝ枕かりね物うき故郷の 夢さへはますむら時雨哉</p> <p>旅宿時雨</p>	<p>b27</p> <p>山姫のいかにむなく織すてん 人もきてみぬ秋のにしきは</p> <p>過にし年ともなひてもみちみにまかりける山 をこの秋はたれもしらてや見る人もなきとあ る人の申送りし返しよみてつかはしける</p>	<p>b26</p> <p>紅葉のちしほのこすゑうつろひて くれなるにほふ峯の夕霧</p> <p>霧中紅葉</p>
<p>b31 D067 C281 x</p>	<p>b30 D066 C280 s63</p>	<p>b29 D087 C301 s62</p>	<p>b28 D086 C300 s61</p>	<p>b27 D116 x s60</p>	<p>b26 D105 x s59</p>

<p>b37</p> <p>ゆかりもあやなくすのうら風</p> <p>葛</p>	<p>b36</p> <p>おもかけは今も身にそふしら露の をきてわかれしあさかほの花</p> <p>槿</p>	<p>b35</p> <p>ねさめをはならはぬみにも物思へは あかつきをきの袖そ露けき</p> <p>曉露</p>	<p>b34</p> <p>物おもへはとしのなかはを吹分る かせの音にもぬるゝ袖かな</p> <p>初秋</p>	<p>b33</p> <p>すゑつみに契むなしぎ中ならば しらせしものをそこの心は</p> <p>悔恋</p>	<p>b32</p> <p>けさは猶つらきころを恨つる 日ころの袖はぬるゝかすかは</p> <p>逢増、 聞え候敷</p>
<p>Bb37 D043 C260 s69</p>	<p>b36 D042 C259 s68</p>	<p>b35 D038 C255 s67</p>	<p>b34 D035 C252 s66</p>	<p>b33 D057 C273 s65</p>	<p>b32 D068 C282 s64</p>

b43 菊 夜をゝぎあかす露のうき身は ちよをふるきくをかさして何かせん	b42 秋田 世にもはやあき田のひたのひたふるに 心にくてのつゆそひまなき	b41 月 草のみか袖に露けきたくれの よもきか庭の月そさひしき	b40 閨虫 うきことをなれもかたらへきりくす ねられぬ床の夜はの枕に	b39 鹿 さをしかは峯にふもとに迷へとも たつぬるつまのたよりもそある	b38 夕雁 御下心あるへきやうに存候 うらやましくるゝ雲まを行かりも つらをはさらにわかれぬものを
b43 \\ D052 \\ C269 \\ s75 \\ \\	b42 \\ D050 \\ C267 \\ s74 \\ \\	b41 \\ D047 \\ C264 \\ s73 \\ \\	b40 \\ D046 \\ C261 \\ s72 \\ \\	b39 \\ D045 \\ C262 \\ s71 \\ \\	b38 \\ D044 \\ C261 \\ s70 \\ \\

b45 暮秋 おもひあはする名残かなしき 何も述べの事二候間 下心可有之候とかく申されす候敷	b44 紅葉 ふかきより名にもたつたの紅葉ゝの あをかりしころそ今は恋しき
b45 \\ D054 \\ C271 \\ s77 \\ \\	b44 \\ D053 \\ C270 \\ s76 \\ \\

〔付記〕

本稿は、和歌文学会関西七月例会（二〇二一年七月三日）の発表「池田綱政の詠草から見る飛鳥井雅章の和歌指導」を基に加筆修正したものである。御意見をくださった大谷俊太先生・神作研一先生・盛田帝子先生に感謝申し上げます。

なお、貴重な資料の閲覧をお許しいただいた林原美術館の御厚情に心より御礼申し上げます。

（ふくどめ たまみ／本学非常勤研究員）